

## 特集：東アジア比較研究

### 「東アジア比較研究」の目標と成果

中 嶋 嶺 雄

昭和62年度から平成元年度(1987～89年度)にかけて3年間、文部省科学研究費補助金重点領域研究「東アジアの経済的・社会的発展と近代化に関する比較研究」(略称「東アジア比較研究」)が実施された。当該研究は、人文・社会科学系列の最初の重点領域研究として注目されたが、多くの方々の御協力によって、約70名の研究者からなる計画研究を中心に、約40名の研究者による公募研究を加え、初期の研究目標をほぼ達成することができた。

本共同研究は、経済学、政治学、国際関係論、歴史学、文学、哲学など様々なディシプリンに依拠する研究者が東アジア地域を対象に学際的な研究協力体制を築き、毎年1回の全体会議には海外の第一線の研究者も加わって、活発な討論を行った。当研究の研究代表者(副代表は、渡辺利夫・東工大教授、猪口孝・東大教授)の任に当たった私は、昭和62年7月に大磯で開かれた第1回全体会議で「東アジア比較研究の課題と展望——いまなぜ『儒教文化圏』か」と題して次のような基調報告を行った。

今日、米ソ両国が肥大化した巨大軍事国家としてのコストに悩みつつある現実や、欧米先進諸国の経済的・社会的な停滞と混乱を見るにつけ、また、21世紀は軍事的な覇権国家の時代から経済的・社会的な成熟国家の時代へと向かうであろうことを想うとき、現在から21世紀にかけては、日本とその周辺地域の東アジアが、世界における繁栄の活力の中心を担っていくのではないかと予測

される。

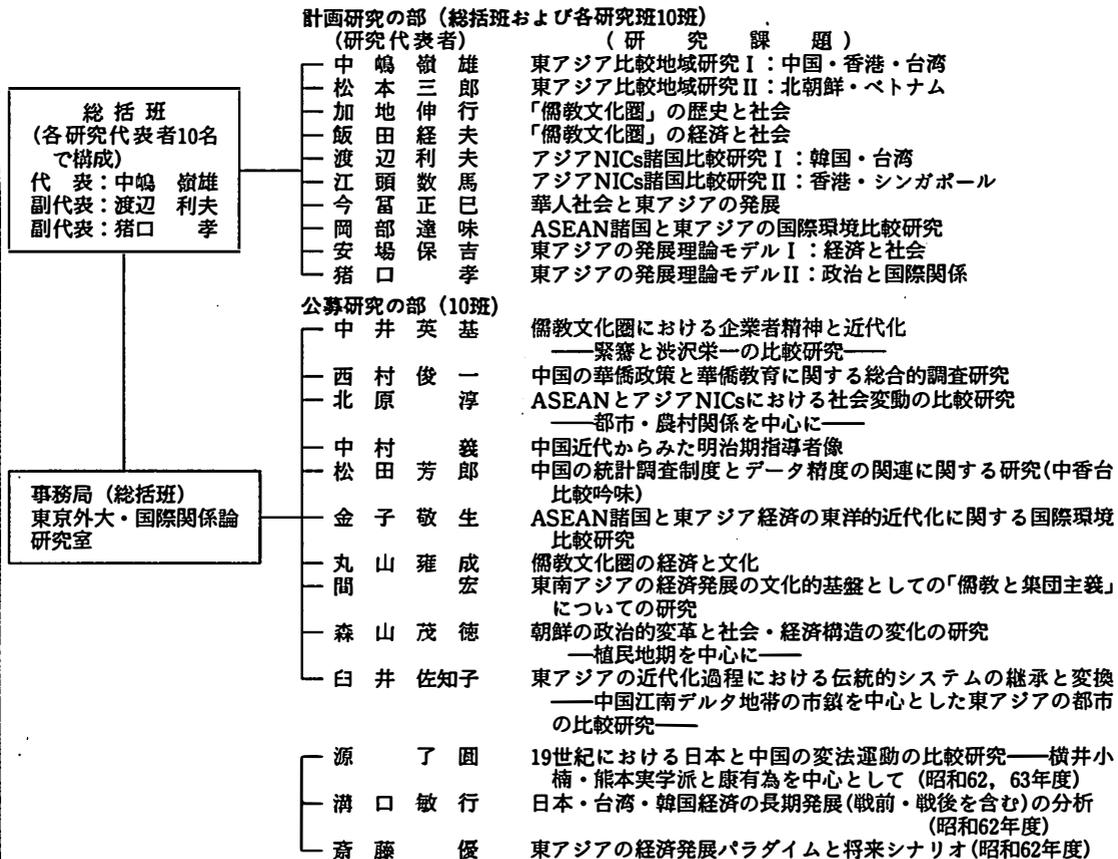
ところで、このような東アジア経済圏ないしは東アジア文化圏の経済的・社会的な発展の背景を「儒教文化圏」という文明論的範疇で考察しようとする試みが、最近の注目すべき趨勢になりつつある。例えば韓国学者の金日坤教授は、『儒教文化圏の秩序と経済』(名古屋大学出版会、1984年)の中で、儒教文化の一番大きな特徴は家族集団主義による社会秩序にあるとし、それが「儒教文化圏」諸国の経済発展の重要な下支えになっていると指摘している。また現代フランスの中国学の権威ヴァンデルメールシュ教授が『アジア文化圏の時代』(大修館書店、1986年)を書き、東アジアの経済的繁栄を「漢字文化圏」という儒教文明の復活としてとらえ、大きな反響を呼びおこしている。さらにアメリカのドバリー・コロンビア大教授が『朱子学と自由の伝統』(平凡社、1987年)で儒教の自由主義、個人主義に新しい光を当てている。

このような学問的試みの背景には、従来の西欧モデルの「近代化論」や、社会主義理論、ロストウ理論に代表されるアメリカ・モデルの近代化理論、そして「従属理論」やその巨視的発展としての「世界システム論」によっては、東アジア諸国の活力を十分に解明できないのではないかという認識があるものと思われる。つまり、これら諸国の実際の発展が、およそ近代化理論で考えられたいくつかのモデルを乗り超えてしまったところに、「儒教文化圏」の新たな挑戦が始まったのだともいえよう。

もとより「儒教文化圏」といっても、同じ儒教

「東アジアの経済的・社会的発展と近代化に関する比較研究」

研究組織図 (平成元年度)



第一回全体会議プログラム

1. 日時	1987年7月10日(金)～12日(日)	(20:50～21:05) <ゲスト・ディスカッサント>:
2. 会場	大磯プリンスホテル	Parris H. Chang
3. 日程		(ペンシルヴェニア州立大教授, 東京外大客員教授)
7月10日(金)		(21:05～21:30) Discussion
14:00～15:00	開会 来賓挨拶/文部省代表の挨拶	
Session (1)		7月11日(土)
15:00～17:00	司会：松本 三郎(慶応大・法学部)	Session (3)
(15:00～16:15)	基調報告：「東アジア比較研究の課題と展望——いまなぜ「儒教文化圏」か」	9:30～11:30
	研究代表者：中嶋嶺雄(東京外大)	司会：中嶋 嶺雄
(16:30～17:00)	Discussion	各班の研究方針報告(計画研究部門・公募研究部門)
17:00～18:00	第2回総括班打ち合わせ会	Session (4)
Session (2)		14:30～15:00
19:00～21:30	司会：飯田 経夫(名大・経済学部)	司会：猪口 孝(東大・東洋文化研究所)
(19:00～19:40)	報告1：「現代中国体制論——レーニン主義体制・一党優位体制・儒教的権威主義体制」	(14:30～15:10)
	猪口 孝(東大・東洋文化研究所)	報告3：「東アジアにおける活力の源泉は何か」
(19:40～19:55)	ディスカッサント：徳田 教之(筑波大・社会科学系)	(15:10～15:25)
(20:10～20:50)	報告2：Japanese Corporation and Western Corporation: The Interaction between Religion, Resources and Human Needs	ディスカッサント：二瓶 恭光(慶応大・産業研究所)
	<ゲスト・スピーカー>：Julian Fairfield (国際ビジネスコンサルタント)	(15:40～16:20)
		報告4：「アジア近代化の比較」
		岡部 達味(東京都立大・法学部)
		(16:20～16:35)
		ディスカッサント：田中 恭子(中部大・国際関係学部)
		(16:35～17:00)
		Discussion
		19:00～21:00
		各班の会合
		7月12日(日)
		9:30～11:30
		各班の会合

第二回全体会議プログラム

- 1. 日 時 1988年9月16日(金)～18日(日)
- 2. 会 場 大磯プリンスホテル
- 3. 日 程

9月16日(金)

- 14:30～15:10 開会の辞 中嶋麒雄(東京外大)  
来賓挨拶/文部省代表挨拶
- 15:10～16:40 招待講演 司会:松本三郎(慶応大)  
王 家驊(中国・南開大・助教授)  
「儒学思想と現代日本」  
金 日坤(韓国・釜山大・教授)  
「儒教倫理と韓国の資本主義」
- 17:00～17:40 ディスカッション: 源了圓(国際基督教大)  
: 徳田教之(筑波大)

17:40～18:00 Discussion

Session (1)

- 20:00～22:00 「東アジア比較地域研究の一断面」議長:安場保吉(阪大)
- 20:00～20:40 報告:中兼和津次(一橋大)(A班)  
「経済発展、制度、文化——比較体制論的考察」  
:小此木政夫(慶応大)(B班)  
「北朝鮮における独自共産主義の形成」
- 21:20～21:30 ディスカッション: L. Deliusin(ソ連科学アカデミー東洋学  
研究所中国部長)  
: 白石昌也(横浜国立大)(J班)
- 21:30～21:40 Discussion
- 21:40～22:00 Discussion

9月17日(土)

Session (2)

- 9:00～11:00 「『儒教文化圏』の歴史と未来」議長:坂田経夫(名大)
- 9:00～9:40 報告:加地伸行(阪大)(C班)  
「儒教の本質」  
:長峯晴夫(名大)(D班)  
「セマウル運動と韓国社会の発展」
- 10:20～10:30 ディスカッション: 金 日坤(韓国・釜山大・教授)
- 10:30～10:40 : 古田博司(下関市立大)
- 10:40～11:00 Discussion

Session (3)

- 11:15～13:15 「アジア NICs 比較研究」議長:渡辺利夫(筑波大)
- 11:15～11:55 報告:川喜多喬(東外大)(E班)  
「『日本の経営』技術の移転可能性」  
:江頭敬馬(日大)(F班)  
「香港・シンガポールの発展と伝統的性格」
- 11:55～12:35 ディスカッション: John Fincher(オーストラリア国立大)  
:大橋勇雄(名大)(D班)
- 12:35～12:45 Discussion
- 12:45～12:55 Discussion
- 12:55～13:15 Discussion
- 14:30～15:30 第3回総括班会議

Session (4)

- 16:00～18:00 「東アジアの発展理論モデル」議長:猪口 孝(東大)
- 16:00～16:40 報告:南 亮造(一橋大)(I班)  
「中国の自動車産業:産業組織と技術」  
:天児 慧(琉球大)(J班)  
「中国の特色ある社会主義近代化についての体験的考察」
- 17:20～17:30 ディスカッション:小島朋之(京都産業大)(A班)
- 17:30～17:40 :栗林純夫(拓殖大)(E班)
- 17:40～18:00 Discussion

9月18日(日)

Session (5)

- 9:00～11:00 「東アジア・華人社会・東南アジア」議長:岡部達味  
(東京都立大)
- 9:00～9:40 報告:今富正巳(東洋大)(G班)  
「馬文学を通しての華人意識の変容」  
:毛里和子(静岡県立大)(H班)  
「中国の国際大循環戦略について」
- 10:20～10:30 ディスカッション:山下清海(秋田大)(G班)
- 10:30～10:40 :濱下武志(東京大)(公募班)
- 10:40～11:00 Discussion

Session (6)

- 13:00～14:30 「近代化と東アジア」議長:中嶋麒雄(東京外大)
- 13:00～13:40 報告:中井英基(北大)(公募班)  
「儒教文化圏における企業者精神と近代化  
——張謇と沈鴻英——の比較研究」
- 13:40～13:50 ディスカッション: 長 幸男(東京外大)  
: 王 家驊(中国・南開大・助教授)
- 13:50～14:00 Discussion
- 14:00～14:30 Discussion
- 14:30～15:00 総括 猪口 孝(東大)  
会の辞 渡辺利夫(東工大)

第三回全体会議プログラム

- 1. 日 時 1989年9月15日(金)～17日(日)
- 2. 会 場 大磯プリンスホテル
- 3. 日 程

9月15日(金)

- 15:00～16:00 開会の辞 渡辺利夫(東工大)  
来賓挨拶/文部省代表挨拶
- 16:00～16:45 招待講演 司会:松本三郎(慶応大)  
Prof. Leon Vandermeersch(パリ大)  
「アジア文化圏の時代」"The Era of Asian Culture Area"
- 17:00～18:00 ディスカッション: 川本邦衛(慶応大)  
: 福井文雅(早大)  
: 阮翠収(グエン チュオン タウ)  
(ヴェトナム社会科学委員会史学院教授  
<慶応大訪問教授>)
- 18:00～18:50 Discussion
- 20:30～21:30 平成元年度第二回総括班会議

9月16日(土)

Session (2)

- 9:30～10:15 招待講演 司会:安場保吉(阪大)  
Prof. Ronald P. Dore(Imperial College)  
「東アジアの経済的・社会的発展と儒教文化」  
"Economic and Social Development in East Asia and  
Confucian Culture"
- 10:30～11:10 ディスカッション: 姜成求(カン ソン ク)  
(韓国文化放送理事 <東大東洋文化研究  
所客員研究員>)  
: 坂田経夫(国際日本文化研究センター)

11:00～12:00 Discussion

Session (3)

- 16:00～16:45 招待講演 司会:源了圓(国際基督教大)  
Prof. Wm. Theodore de Bary(コロンビア大)  
「中国における自由の伝統」"Liberal Tradition in China"
- 17:00～17:40 ディスカッション: 加地伸行(阪大)  
: 河田梯一(関西大)
- 17:40～18:30 Discussion

9月17日(日)

Session (4)

- 9:30～10:15 招待講演 司会:岡部達味(東京都立大)  
Dr.李炯才(リー クワン チョイ)(UIC 韓米コーポレー  
ション総支配人(前駐日シンガポール大使))  
「社会的・経済的発展と華人意識」  
"Social and Economic Development and Chinese Identity"
- 10:30～11:10 ディスカッション: 田中恭子(中部大)  
: 今富正巳(東洋大)

11:10～12:00 Discussion

総括 Session

- 14:00～14:30 全員討論  
パネラー: 江頭 敬馬(日大)  
: 原 洋之介(東大)  
: 中兼和津次(一橋大)
- 14:30～15:30 総括 中嶋麒雄(東京外大)
- 15:30～16:00 閉会の辞 猪口 孝(東大)

的な倫理をどのように受けとめるかにおいても、儒教の徳目の受けとめ方に関しても、国民性による違いがある。またいうまでもなく、「儒教文化圏」といっただけで日本やアジア NICs 諸国の経済的・社会的発展の鍵のすべてを解説することなどはできないであろう。中国や北朝鮮、ヴェトナムの発展が立ち遅れているのは、むしろ社会主義の制度的な問題として考えた方がわかりやすいであろうし、日本が成功した要因としては、明治維新以来の日本がヨーロッパ近代の精神文化や科学技術を全面的に受容したこと、第二次大戦後の国内諸改革、現代アメリカ産業文明の巨大な影響といった根本的かつ常識的な要因を無視することはとうていできない。さらに台湾には政治的民主化の課題や台湾としてのアイデンティティの確立という問題が存在し、韓国には、最近の学生運動の高揚にも見られる不安定な政治・社会情勢をいかに克服すべきかという重要な問題が残されている。

しかし、今後東アジア経済圏がさらに大きくクローズアップされるであろうだけに、これら地域の相違よりも、むしろ全体としての文化的同一性、すなわち「儒教文化圏」という文明的位相の歴史的意味づけと自己確認、自己限定が改めて迫られることになるのではなかろうか。その際には当然、復古調のアジア主義やアジア運命共同体的なアナクロニズムに陥ることは厳に避けねばならない。

いずれにせよ「儒教文化圏」という人文・社会科学にとっての新しい問題提起に関しては、検討すべき課題が山積している。本年度から三年間の予定で始まる重点領域研究「東アジアの経済的・社会的発展と近代化に関する比較研究」は、そのための大型研究プロジェクトでもあるので、多くの方々の建設的な御批判を得たいと願っている。

#### 〈参考文献リスト〉

日本経済調査協議会「北東アジア知識人会議報告書」(1982年1月)。  
同 「北東アジア知識人会議日中学者会議議事録」(1982年4月)。  
同 「北東アジア経済圏——現状とあるべき方向——」(1987年3月)。  
金日坤「儒教文化圏の秩序と経済」(名古屋大学出版会, 1984

年)。

水野正一・飯田経夫・藤瀬浩司編「文化と経済発展」(名古屋大学出版会, 1983年)。  
Herman Kahn (with the Hudson Institute), *World Economic Development: 1979 and Beyond*, Colorado: Boulder, 1979。  
Roderick MacFarquhar, *The post-Confucian challenge*, *The Economist*, 1980。  
Léon Vandermeersch, *Le nouveau Monde sinisé*, Paris: Presses Universitaires de France, 1986. 邦訳, 「アジア文化圏の時代」福録忠恕訳, 大修館書店, 1987年。  
Wm. T. ドバリー「朱子学と自由の伝統」山口久和訳(平凡社, 1987年)。  
武内義雄「儒教の精神」(岩波新書, 1939年)。  
源了圓「近世初期実学思想の研究」(創文社, 1980年)。  
長幸男(編集・解説)「実業の思想」〈現代日本思想大系11〉(筑摩書房, 1964年)。  
中根千枝「社会人類学——アジア諸社会の考察」(東京大学出版会, 1987年)。  
M. フリードマン「中国の宗族と社会」田村克己・瀬川昌久訳(弘文堂, 1987年)。  
橋本萬太郎・鈴木孝夫・山田尚男(編者)「漢字民族の決断——漢字の未来に向けて」(大修館書店, 1987年)。  
永井陽之助編「20世紀の遺産」(文藝春秋, 1985年)。  
永井道雄編「非西欧社会における開発」(国際連合大学, 1984年)。  
武田清子編「比較近代化論」(未来社, 1970年)。  
大塚久雄「社会科学における人間」(岩波新書, 1977年)。  
山之内晴「社会科学の現在」(未来社, 1986年)。  
藪野祐三「近代化論の方法——現代政治学と歴史認識——」(未来社, 1984年)。  
H.-U. ヴェーラー「近代化理論と歴史学」山口定・坪郷実・高橋進訳(未来社, 1977年)。  
I. ウォーラステイン「近代世界システム」(I, II) 川北稔訳(岩波書店, 1981年)。  
佐藤定幸「多国籍企業の政治経済学」(有斐閣, 1984年)。  
Robert A. Scalapino, Seizaburo Sato, Jusuf Wanandi (eds.), *Asian Economic Development: Present and Future*, Berkley: Institute of East Asian Studies, University of California, 1985。  
小島清・笠井信幸・渡辺利夫・田中拓男「日本とアジア中進国」(産業経済研究協会, 1980年)。  
渡辺利夫「成長のアジア 停滞のアジア」(東洋経済新報社, 1985年)。  
渡辺利夫・梶尾弘和「アジア水平分業の時代」(日本貿易振興会, 1983年)。  
猪口孝「国際関係の政治経済学——日本の役割と選択」

- (東京大学出版会, 1985年) 21世紀の太平洋地域経済構造研究会報告書『太平洋時代の展望』(1985年8月)。  
 滝田 実編『図説 アジア・太平洋時代 21世紀に目を向けて』(アジア社会問題研究所, 1985年)。  
 室谷克実『「韓国人」の経済学』(ダイヤモンド社, 1987年)。  
 チャーマーズ・ジョンソン『通産省と日本の奇跡』矢野俊比古監訳 (TBSブリタニカ, 1982年)。  
 森嶋通夫『なぜ日本は「成功」したか?』(TBSブリタニカ, 1985年)。  
 エドワード・T・ホール/ミドルレッド・R・ホール『摩擦を乗り越える——日本のビジネス・アメリカのビジネス』國弘正雄訳 (文藝春秋, 1987年)。  
 中嶋嶺雄『文明の再創造を目ざす中国』(筑摩書房, 1984年)。  
 同 『香港 移りゆく都市国家』(時事通信社, 1985年)。  
 同 『21世紀は日本・台湾・韓国だ——いま東アジアが世界をリードする——』(第一企画出版, 1986年)。  
 Lucian W. Pye, *Asian Power and Politics: The Cultural Dimensions of Authority*, Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press, 1985.  
 Ronald P. Dore, *Taking Japan Seriously: Confucian Perspective on Leading Economic Issues*, London: The Athlone Press, 1987.  
 レジ・リトル/ウォーレン・リード『儒教ルネッサンス——アジア経済発展の源泉』池田俊一訳 (サイマル出版会, 1989年)。  
 Tu Wei-ming, *Way, Learning, and Politics: Essays on the Confucian Intellectual*, Singapore: The Institute of Bast Asian Philosophies, 1989.  
 加地伸行『儒教とは何か』(中公新書, 1990年)

以上で試みた共同研究の目標は、各計画研究班の3年間にわたる共同研究によって、様々なかたちで掘り下げられ、深められた。

もとより、「東アジア比較研究」は必ずしも「儒教文化圏」の研究ではなく、東アジアの経済的・社会的発展と儒教との関連についても、必ずしも一致した結論が出たわけではない。しかし、この点は、人文・社会科学の場合、当然のことだと言えよう。

第3年目の全体会議は平成元年9月に大磯で開かれたが、そこで私が研究代表者として行った「総括」は、共同研究の一つの到達点を反映しているものと考えている。「総括」は次のとおりであった。

この3日間素直な議論ができた。単一の結論を出すのが難しいテーマだが、相互に問題点を出し合い理解を深めるプロセスが重要である。共同研究の成否は個人が最後に出す業績にかかっている。

さて、我々のテーマを振り返ってみると、背景としては、近代化の再検討の必要性、東アジアの同時的発展を説明する道具を既存の学問が備えているか、比較研究のあり方の模索、ということがあった。儒教研究や儒教決定論ではないが、社会・経済発展の文化的歴史的背景を儒教レベルに遡って説明したいという合意はあった。

また以下の3つの潮流もあった。まず欧米の社会的危機と東アジアの台頭が欧米の関心を呼んだ。最初に儒教文化圏ないし経済圏と言いだしたのはH・カーンだったが、R・マックファーカーやC・ジョンソン、L・ヴァンデルメールシュ、R・ドーア、L・パイ等も注目してきた。アジアからの問掛けもわずかながらあったが、これらの欧米からの提起を我々がどう取り上げるかという問題がある。

第2に社会主義の停滞がある。ベトナムや中国においても経済不調から儒教文化・伝統の再検討の動きが出てきた。こうして、第3に、従来のマルクスやウェーバー等のグランド・セオリーや経済学は、東アジアの発展を説明しうるかという問題が出てきた。

こうして研究が開始されてから様々な変化が起きた。アジアでは期待された中国がどうなるかという事態になった。ヨーロッパは活気を取り戻してきている。この活気は自文化の絶対化への反省をさせるが、同時に「安っぽい文化相対主義」に陥ってはならない。

そこで2つの問題を指摘しよう。1つは中国とNIESとの関係である。果たして中国を含めてアジアの台頭と考えていいのか? 従来から私はこの点に懐疑的だったが、経済停滞とフラストレーションが天安門事件を起こしたと思われ、文盲率も高い中国とNIESの違いはシステムの問題があると言えよう。

2つめは東アジアの権威主義体制の変容である。台湾に顕著だが、この点の比較研究も必要である。官僚制や共同体等を通じての比較もなされ

ねばならない。中国の共同体ではウェーバーの家産官僚制モデルがあったが、この限界が本研究の問題提起でもある。

一方、儒教と発展を結びつけることはできない。文化的背景・慣行、「文化的次元」(L・パイ)としてであり、そこからつくられた制度・体制が経済発展とどう関わるかである。儒教文化を通過した社会とそうではない社会の背景の相違とも言える。無論、文化を扱う際には肯定材料も否定材料も引き出せるので注意を要する。同時に従来の価値体系の再検討や他の価値体系との関連の考察も必要である。

発展の要因は様々であるが、一度 take-off を始めると儒教文化はプラスに作用するというのが昨年(1988年)の全体会議でのまとめであった。

本年度(1989年)は、今回の全体会議の討議をふまえて、このような前提を個別に検証していただき、その成果を論文としてまとめていただきたい。

以上が、私の総括の要点であったが、こうして、「東アジア比較研究」は、数多くの成果と課題を残して3年間の研究を達成した。今後は、各自の個別研究を基礎にした各班の共同研究成果をとりまとめ、できれば「東アジア比較研究叢書」として公刊したいと考えている。

私は、「東アジア比較研究」全体の研究代表者をつとめるとともに、「東アジア比較地域研究Ⅰ：中国・香港・台湾」チーム(A班)の研究代表者をつとめたので、次に、このチームの分担課題に則して述べてみたい。

「東アジア比較研究」という全体的課題のなかで、中国大陸及び周辺香港、台湾地域を比較研究するというA班の研究課題は、極めて重要かつ現実性を帯びたものであるとの共同認識のもとに、昭和62年度の研究を推進した。

まず昭和62年7月12日には大磯での全体会議の後、A班の62年度第1回の研究会が行われ、問題点の探求・相互点検ののち具体的な研究分担が決められた。中国の政治体制・政治状況と現代化に関しては、徳田教之(筑波大)と小島朋之(京産大)が分担し、経済体制・経済政策と現代化に

関しては、尾上悦三(東京国際大、平成元年5月御逝去)と中兼和津次(一橋大、当時)が分担、香港・台湾に関しては中嶋嶺雄(東外大)が主に政治・社会面を、尾上悦三が経済面を担当することとした。第2回研究会(9月27日～28日)は京都で開催され、徳田教之：「中国政治体制改革をめぐる諸問題」、中兼和津次：「中国における農工間資源移転」の2つの報告及び討論が行われた。

第3回研究会(1月9日～10日)は東伊豆で行われ、尾上悦三：「1987年の中国経済の回顧と88年の展望」、小島朋之：「中国の政策決定構造について——最近の政治改革と関連して」の2つの報告及び討論が行われた。

昭和63年度の目標は、62年度に共同研究会と並行して行われた文献調査と資料分析を基に、理論的、実証的な比較研究を押し進めることであったが、研究者相互が随時情報交換を行い、また、数次の研究合宿を重ねたことにより、共同研究としては充実した成果をあげることができた。中国、台湾、香港という地域的な比較はもとより、政治学、経済学、国際関係論、地域研究という様々なディシプリンによる方法論的な比較が試みられたことも大きな成果であろう。新たに井尻秀憲(神戸市外大)をメンバーに加えた研究会の個々のテーマを列挙すれば、以下のとおりである。

第1回研究会(7月2日～3日)では、井尻秀憲：「台湾の民主化と政治発展」、中嶋嶺雄：「台湾および香港の社会的・経済的發展とその将来展望」と題する報告が行われ、参加者全員による活発な討議がなされた。

第2回研究会(9月15日～16日)では、尾上悦三：「台湾・香港の経済動向」、小島朋之：「沿海地区経済発展戦略と「国際大循環」経済」と題する報告が行われ、熱心な討議がなされた。

第3回研究会(12月3日～4日)では、徳田教之が「台湾・中国民主化比較」、中兼和津次が「中国の工業化の可能性」と題して報告し、活発な討論が行われた。

第4回研究会(2月20日)は、A班・J班合同の研究会として催され、他の計画研究班/公募研究班からも数名の参加者があり、きわめて実り多いものとなった。内容は、J班が先に季刊誌「レヴァイアサン」第3号(木鐸社、1988年)で公表

した研究の中間成果をめぐる討議を中心とした。徳田教之が猪口孝論文に対する論評、井尻秀憲が若林正文論文に対する論評、中嶋嶺雄が伊豆見元論文に対する論評、小島朋之が田中明彦論文に対する論評、中兼和津次が白石昌也論文に対する論評をそれぞれ行った。

次いで平成元年度の目標は、過去2年間の研究実績をふまえ、理論的、実証的な比較研究を更に深く押し進め、まとめの段階に入ることであった。研究分担者は随時情報交換を行い、また年に4回の研究合宿を重ねたことにより、充実した共同研究の成果があがったものと確信している。平成元年度は、国際社会が脱社会主義、脱冷戦へと大きく変動した年となり、当研究班の研究対象となっている中国、台湾、香港においても、その影響は多大なものがあった。それは、当研究班の研究合宿にも反映されたが、個々の研究会を列挙すれば、以下のとおりである。

第1回研究会(6月11日～12日)では、新たにメンバーに加わった国分良成(慶応大)が「中国の民主化運動——最近の情勢」、小島朋之が「中国の政治改革——激動の過程」と題する報告を行った。6月4日の天安門事件直後ということもあり、なお一層活発な討議がなされた。

第2回研究会(9月14日～15日)では、井尻秀憲が「台湾の民主化と政党の役割変化」、徳田教之が「中国政治改革の現段階」と題して報告し、真剣な討論が行われた。

第3回研究会(10月15日～16日)では、中兼和津次が「中国の工業化とそのメカニズム」、井尻秀憲が「台湾現地調査報告」と題した報告を行い、討議が行われた後、各自の研究成果のまとめ方が検討された。

第4回研究会(2月26日～27日)では、国分良成が「政治体制改革の形成と展開：1980年代」、小島朋之が「中国の改革・開放と台湾、香港との相互関係」、井尻秀憲が「台湾地方選挙現地調査報告」と題する報告を行い、活発な討議がなされた。また、各分担者の研究成果の論文テーマを決定し、

現在執筆に取り組んでいる。

当面の結論としては、天安門事件に示される体制的な危機と深刻な経済的困難に直面しつつ試行錯誤を繰り返しつつ依然として将来展望が不透明な中国、驚異的な経済発展と政治改革の著しい進展によって先進国への途上に立ち、経済的・社会的成功をもたらした「台湾経験」と外交的孤立にもめげない「弾性外交」によって世界各国との実質的な交流のチャネルを拡大し、経済的・社会的には福建省一帯にすでに大きな影響力を与えつつある台湾、1997年7月1日を期しての中国への返還に直面した心理的動揺のなかで依然として経済発展をつづけ、その影響力がすでに広東省から華南一面を蔽いつつある香港という現状認識がほぼ一致して獲得された。

こうして、中国、香港、台湾を対象として地域研究が進められたが、最後にこれを「比較研究」の立場からどのようにまとめるかが当面の課題になっている。

すでに述べたように、「比較研究」は単なる地域間の個別研究の羅列ではなく、経済的にも社会的にも密接な相互関連をもつ地域のなかのいくつかの共通項の比較、例えば国民所得などの経済指標、教育の普及率や各種のインフラストラクチャーなど近代化基盤の比較、官僚制や政策決定過程などの制度論的・機構論的な比較考察がより重要であろう。このような「比較研究」を通じて、東アジア地域の全体像はより鮮明に浮き彫りされるであろう。

中嶋 嶺雄(なかじま・みねお、1936年生)  
東京外国語大学 教授、東京大学大学院社会学研究科修了。社会学博士。  
研究課題：国際関係論／現代中国学／東アジア地域研究。受賞：サントリー学芸賞(「北京烈烈」<筑摩書房、1981年>)。

文部省科研究費重点領域研究  
課題番号：01605002

# 学術月報

Japanese Scientific Monthly  
Vol. 44 No. 1 通巻第553号

科学・技術の在り方 ————— 沢田敏男

民族植物学と文化複合 ————— 中尾佐助

1993年EC統合と地域問題 ————— 梶田孝道

特集：東アジア比較研究：その1

「東アジア比較研究」の目標と成果 ————— 中嶋嶺雄

儒教とは何か—「儒教文化圏」の歴史と社会—

————— 加地伸行

アジアNIES諸国比較研究：韓国・台湾

————— 渡辺利夫, 栗林純夫

香港・シンガポールの発展と儒教文化 ————— 江頭数馬

ASEAN経済の行方—家産性国家は発展できるか—

————— 安場保吉

光受容の分子機構 ————— 古谷雅樹

不定胚分化における全能性発現 ————— 駒嶺穆

植物の老化と遺伝子発現の柔軟性 ————— 渡辺昭

平成2年版科学技術白書の概要 ————— 科学技術庁

科学研究費補助金〔試験研究〕成果の紹介「素子開発」

松山公秀, 松本敏雄

梅澤喜夫, 松波弘之, 中村信良

若手研究者への手紙：“初恋を思ふべし” ————— 犬養孝

散歩道：“予知”について ————— 藤井昭彦

1991

1

日本学術振興会